ニッセイ基礎研究所　2026-10-02

基礎研レター

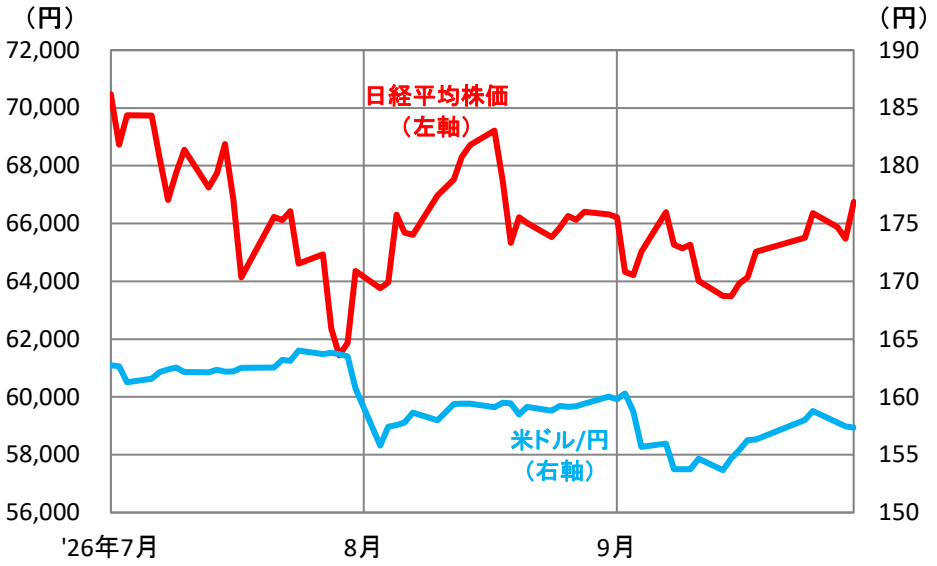
金利高・外部リスクが重しに

～2026 年9月の日本株式の振り返りと今後のポイント～

金融研究部 上席研究員　前山　裕亮
(03)3512-1785　ymaeyama@nli-research.co.jp

- 2026 年9月の日本株式は、金利上昇や中東情勢の不透明感、原油高などを背景にボックス圏での推移が続いた。
- 日経平均株価は米ハイテク株高やAI・半導体関連銘柄の上昇が追い風となり月間では小幅な上昇となったが、TOPIXは3月以来となる6カ月ぶりの下落を記録した。
- 今後についても、AI・半導体関連銘柄、中東情勢や原油価格、さらには日米の金融政策や金利の動向に左右される展開が続くと考えられる。
- もっとも、日本企業の業績自体は堅調に推移しているとみられ、企業の収益環境が急変しない限り、業績拡大に伴う株価の下支えが期待できよう。

【図表】日経平均株価とドル/円レートの推移



（資料）LSEG より作成。

 Copyright ©2026 NLI Research Institute All rights reserved

1――ボックス圏での推移が続く

2026年９月の日本株式を振り返ると、上旬は世界的な金利上昇や中東情勢の不透明感などが嫌気され、日経平均株価は３日に６万4,200円台まで下落した。ただし、金利上昇が一服したことや米半導体株高などから反発し、７日には６万6,400円目前まで戻した。その後は中東情勢の不透明感が引き続き重しとなったこともあり上昇は続かず、６万5,200円前後で推移した。

中旬に入ると、日経平均株価は原油高や再び金利が上昇したことなどから、11日から15日にかけて３日続落し、14日、15日には６万3,500円を下回る水準となった。しかし16日には反発し、米ハイテク株高なども追い風となり18日には６万5,000円台を回復。さらに下旬は方向感をやや欠く展開となったが、シルバーウィーク中の米ハイテク株の上昇に加え、原油高が一服したことなどから一段高となり、月末は６万6,700円台まで上昇して終えた。

2――日本株式全体では下落

このように９月は日経平均株価がおおむね６万3,000円台から６万6,000円台のボックス圏で推移したが、AI・半導体関連銘柄が上昇したこともあり、月間では小幅な上昇となった。ただし、TOPIXについては、３月以来となる６カ月ぶりの下落を記録した。

東証33業種別に見ても、上昇したセクターは「石油・石炭製品」「情報・通信業」「銀行業」「海運業」など33業種中７業種に限られた。その一方で26業種が下落し、「鉱業」「その他製品」「水産・農林業」「輸送用機器」は下落率が６％を超え顕著であった。

3――業績の下支えを期待

９月に米FOMCと日銀の金融政策決定会合で利上げが決定され、加えて今後の利上げが意識されたこともあり日米の10年国債利回りがそれぞれ３％台、５％台に乗せるなど長期金利が上昇した。中東情勢や原油価格の高止まりと合わせて、株価の下押し要因となった。10月も米FOMCが27、28日に、日銀の金融政策決定会合が29、30日に控えている。日本株式自体に割安感が乏しいこともあり、日米の金融政策やそれに伴う金利の動向に左右される展開が続くだろう。あわせて日経平均株価は、引き続きAI・半導体関連銘柄の動向にも影響を受けやすいと考えられる。

もっとも、日本企業の業績は堅調に推移しているとみられる。９月も堅調な企業業績が株価を支え、下落したTOPIXについても最高値圏を維持している。今後も企業の収益環境が急変しない限り、業績拡大に伴う株価の下支えが期待できる。10月中旬からの決算発表で好決算や企業の業績見通しの上方修正が続けば、下値が切り上がる展開やもう一段高となる可能性もあるだろう。

本資料記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と完全性を保証するものではありません。
また、本資料は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。